

～ 地域医療支援病院としての役割を意識して地域と医療の連携を深める ～

さいたま市民医療センターだより

ご挨拶



目次:

ご挨拶	1
災害拠点病院としての役割	2
DMATの活動	2
地域との更なる連携	3
DMATの紹介	4
DisasterABCの様子	4

社会医療法人
さいたま市民医療センター

〒331-0054
さいたま市西区島根299-1
TEL 048 (626) 0011
FAX 048 (799) 5146

あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年もスタッフ一同、地域医療の充実に向けて頑張っておりますので、よろしく申し上げます。

さて、本年3月1日で当院は開院丸9年を迎え、節目の年となる10年目に突入します。病院を人生に例えますと、そろそろ成人式を迎えた頃でしょうか。振り返ってみますと“ゼロ”からの出発で、ひたすら駆け抜けてきた9年間でした。職員や関係者の努力によって学会教育病院を一つひとつ取得し、現在は様々な学会の教育病院となり、基幹型臨床研修病院、そして総合診療専門研修の基幹病院にも認定されました。さらに、さいたま市内初の社会医療法人、そして2番

目の地域医療支援病院に認定されました。医師会の先生方のご協力により紹介率88%、逆紹介率98%と全国的にもトップクラスの水準を維持しており、かかりつけ医とホスピタリスト(病院総合医)の理想的な医療連携を具現化してきました。

平成28年には災害拠点病院にも認定されました。救急総合診療科の坪井謙科長を中心にDMATが結成され、地道な訓練にも日夜励んでおります。先月には災害時医療支援車(DMATカー)も配備されました。私は阪神淡路大震災の際、震源地である兵庫県立淡路病院に勤務していた経験から、心リハ学会の災害医療担当、大宮医師会では災害医療担当理事に任命されています。平時から行政や医師会と連携し、万一の災害時にも機能できる病院運営を目指して参ります。

結びに、皆様のご健勝とご多幸を心から祈念申し上げ、新年の挨拶といたします。



副院長 石田 岳史
大宮医師会災害医療担当理事



“災害拠点病院としての役割”

(院長)

当センターは、平成28年12月28日に災害拠点病院の認定を受けました。そして坪井先生といえば、災害医療というのが私の印象にありまして、医師会の先生方も同様にあると思います。災害拠点病院として、当センターはこの地域における役割や位置づけを先生にお話し頂きたいと思います。

(坪井)

当センターの特徴として、医師会と非常に密接な関係のある災害拠点病院ということで、さいたま市の他の災害拠点病院である自治医科大学附属さいたま医療センター、さいたま赤十字病院あるいはさいたま市立病院とは役割が違うと思っています。



(坪井)

さいたま市内では、医師会と一緒に災害について考えていくという文化がまだないので、当センターの立ち位置はそういうところにあると考えています。医師会と連動し、災害時に地域の備えとなるべきだと考えています。そのためには地域の病院や医師会と連携しながら、色々な訓練や密接な連絡方法などを確立させていく努力が必要だと思います。今はそのレベルには達していませんが、今後そういった環境を作りたいと思っています。



“DMATの活動について”

(院長)

当センターはDMATを所有していますが、これは先生の活動とはどのような関係がありますか？

(坪井)

当センターのDMATは、他の地域で災害があれば当然こちらから行く形としてのDMATを保有していますが、東京で首都直下型の地震や近隣の県で何か災害が起きて、当センターが多くの患者さんを受け入れる場合には、他のDMAT達を繋ぐ役目と考えていて、我々が外に出るのではなく、我々がどのようにDMATを受け入れるのかを考えています。

熊本での災害時に、今までで最大数のDMATが派遣されましたが、そのチームをどのように使うべきかというロジスティックな活動が、非常にプアーでうまく機能しないことがありました。



人ばかりいて、何もできない人がいる状態でした。最近、厚木基地で行われた災害訓練でも、中枢となる統括者がうまく捌けず、たくさん人がいても役に立つことが出来ないということがありました。当センターを含めた災害拠点病院は、どうやってDMATを受入れて、どういう風に活用していくかを働きかけていかなければならないのですが、当センターのDMATはその役目を担っていて、DMATの気持ちになってどういうことができるのかを考えてあげられることができると思っています。受入時は中継の役割をし、外で何か起きた場合は外に出ていくという風に動いていかなければいけないと思っています。



さいたま市民医療センターDMATカー



第36回さいたま市民医療センターICLSコースの様子

“災害拠点病院、DMATとして地域と更なる連携を”

(院長)

災害拠点病院、あるいはDMATとして、今後この地域の病院やクリニックとの連携が必要になってきますか？

(坪井)

最近私たちは、トリアージや治療エリアの訓練をこの地域の病院の方たちにも開放し、参加して頂けるよう活動しています。災害の意識をというものを当センターから外に向けて発信していくことが大切だと思っています。私も埼玉メディカルセンターで講演をしたり、トリアージの訓練の手伝いに行ったりと私たちがやっていることを外の病院に教えながら、少しずつ周りの病院も災害時の対応スキル上がればいいなと思っています。我々がすべての患者を受けいられるわけではないので、地域の救急告示病院とコミュニケーションを取る必要がありますので、この地域では当センターが災害時の救急医療の中心的な存在にならなければいけないし、指導や教育に関しても中心的な存在にならなければいけないと思っています。

今後も引き続き、地域に貢献
できるよう努力して参ります。

院長 加計 正文



さいたま市民医療センターDMATの紹介

DMATとは、医師、看護師、業務調整員（医療職および事務職員）から構成される災害派遣医療チームとなります。現在、医師2名、看護師2名、業務調整員2名（リハビリテーション科 作業療法士・経営企画課員）が日本DMATおよび埼玉DMATに登録されております。今のところチームとしての出動実績はありませんが、災害発生時にはいつでも出動できる体制です。

主な訓練参加実績

平成28年11月28日～12月1日	災害派遣医療チーム研修（東京都）
平成29年 3月17日	埼玉DMAT養成研修（埼玉県）
平成29年 7月29日	大規模地震時医療活動訓練（大阪府）
平成29年 9月 1日	九都県市合同防災訓練（神奈川県）
平成29年11月24日	埼玉県国民保護共同図上訓練（埼玉県）



NPO法人 医療危機管理支援機構協力のもと、第3回目となるDisaster ABC（災害医療訓練・研修会）を開催いたしました。職員45名、外部医療機関2名、看護学生28名が参加し、看護学生に模擬患者役として協力していただき、トリアージ・治療・災害対策本部などの講義・実技を行いました。また、当日は天候が優れない中、近隣の医療機関・市役所などから39名の方々に見学に来ていただきました。

DisasterABC開催（平成29年10月29日）



編集後記

皆様あけましておめでとうございます。平成29年末にお届けする予定であった「第11号さいたま市民医療センターだより」でしたが残念なことに年を越してしまい、申し訳ございません。しかしながら、広報委員ならびに関係各位のご協力により新年早々に無事発行に至ることが出来ました。今号は当センターの特徴である災害拠点病院としての役割をはじめDMATの活動、地域との連携などを中心に掲載させて頂きました。御一読いただければ幸いです。

発行元
さいたま市民医療センター
広報委員会 委員長 小林 裕